丸尾文乃・伊村 智：富士山の高山帯における蘚類植物相

観察は、富士山の高山帯植物相の構成要素である。富士山は日本の最高峰である。本研究では、富士山の高山帯植物相の構成及び垂直分布を把握することを目的とした。

富士山の静岡県側（富士宮ルート登山道）の標高2600m以上の斜面において標高200mごとに、および山頂近付近において蘚類植物相調査を行い、46点の標本を得た。

その結果、8科12属18種（未同定含め）が確認された。ギンゴケ、フォーリーイチョウウロコゴケのように山頂付近に特異的に出現する種が多く確認された一方で、ヤマコスギゴケ、ハリシギゴケのようにその標高にも広範に確認される種もあった。出現種数は標高が上がるとつれ減少していくが、一転して山頂付近で最高値を示した。

富士山の斜面はほとんどがスコリアで覆われ、ところどとで岩場が点在するが、岩場が蘚類の主な生業地となっている。富士山山頂付近で出現種数が多いのは、比較的安定していると考えられる岩場が多いためであろうと考えられる。また、岩場が多いということは蘚類の生業可能な環境が多様であると思われる。

現在、さらなる詳細なデータ収集のため、富士山静岡県側および山梨県側（吉田ルート登山道）にて標高100mごとにサンプリングを行っている。また、富士山では1950年と1970年に蘚類の植物相調査が元々古屋大学名誉教授の放草典雄先生によって行われている。この過去のデータと現在のデータを比較することで、富士山の高山帯における蘚類植物相の時変化を検討することを試みる予定である。

（総研大・極地科学、国立極地研究所）

友岡秀文・柳原恵子・渕村正樹・山口富美夫・出口博則：西表島における生葉上苔類と被着生植物の関係

西表島は琉球列島のほぼ南端に位置する。西表島は変熱帯気候に属し、島の植生の大部分がケナガエサカキスダジイ群集に覆われる。温暖で湿潤な森では細管束植物（被着生植物）の生葉上に小型の苔類（生葉上苔類）などが生している。日本の生葉上苔類に関してはHorikawa（1932）、上村（1939）、新（1973）、中西（1996）などがまとめており、10科20属75種が報告されている。しかし、西表島の生葉上苔類に関しては、蘚類フローラの中に断片的に報告があるのみで詳細な研究はなされていない。

本研究では、西表島の生葉上苔類フローラと共に、生葉上苔類と被着生植物との関係を明らかにすることを目的とした。調査は西表島横断線（浦内川上流端－大宮林道入口）沿いに行い、生葉上苔類9属20種、被着生植物24属32種（被子植物13属17種、シダ植物11属15種）を確認した。また、生葉上苔類の生育には被着生植物との関の特異性よりも、着生植物の地面からの高さが影響している。

（広島大・院・理・生物科学）